

研究主題

主体的・協働的に学び合う子の育成
～伝え合いを通して、教科の資質・能力を育成する後半充実型授業づくり～

1 研究主題の設定理由

予測不可能な未来を生きる子供たちには、「何を知っているか」よりも「どのような問題解決を成し遂げられるか」という力が求められており、学校では、実社会で生きて働く力である資質・能力を身に付ける必要がある。さらに、日本が提唱する未来社会のコンセプトである **Society5.0** には、社会課題と経済発展を解決する超スマート社会が提示されており、その実現のためには、教師と児童が各教科等で **I C T** を効果的に活用した授業を行っていくことは不可欠とされている。

本校では、今までの校内研究において、「書くこと」で児童の自己の考えや思いを表出させてきた。「書くこと」の積み重ねから、自己の考えや思いを変容させ、よりよい思考へ変化させる児童が増えてきた。また、日常的に書くことが習慣化され、書くことで達成感や充実感も感じるようになってきた。そして、昨年度は国語科の説明的文章に焦点化し、授業者が教科の資質・能力を明確にもち、その資質・能力に迫ったり、獲得したりする手立てを講じてきた。その中で、根拠や理由を明確にして、自己の考えを書き、伝え合うことに力を入れてきた。自己の考えを書くことで、相手に伝えたい、聞きたいと相手意識をもつことができた一方で、どのように相手に伝えたらよいのか、どうすれば自分の考えをより相手に伝えられるのかという課題も見られた。一方通行の交流、反応が返ってこない交流が多く、本校の課題が明確になった。

中央教育審議会答申に示される「協働的な学び」とは、「探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成すること」である。今年度は、昨年度の「対話的」の視点から、さらなる他者意識をもつためにも、教師、友達、教材等と対話したり、自分自身と個人内対話したりすることで、多様な考えに出会い、考えが広まったり深まったりすることに加えて、地域社会や学級、学年を超えた他者との学びに視点を広げていく。そうすることで、本校児童のさらなる資質・能力の育成につながると考える。

本校児童の「書くこと」で身に付けた力を土台にして、「伝え合い」のボトムアップを図りたい。児童同士が伝え合い、学び合うことで、考えや思いが対立したときに調整力が育まれ、そのことが学力の向上につながる。また、相手の意見を尊重する人権感覚、共感的人間関係など生徒指導的な面においても学び合いは効果的であり、社会を生き抜くために必要な力は学び合いによって培われる。その手段として **I C T** も活用し、児童の学習意欲と教科の資質・能力のさらなる育成を図っていく。

このように、本校の児童の学習実態、研究の積み上げ及び教育事情をもとに、今年度は研究主題を「主体的・協働的に学び合う子の育成」、副題を「伝え合いを通して教科の資質・能力を育成する後半充実型の授業づくり」とし、具体的な研究方法や手立てについて舵を切りたいと考える。

本校の強みでもある「書ける児童」「学習規律の落ち着いた環境」を土台に、「**I C T** の効果的な活用」と「あたたかい伝え合い」を取り入れ、校内研究のテーマに迫っていく。

2 改善の方針

【授業者の改善の方針】

- ・教科の資質・能力を正しく解釈し、授業のねらいを明確にもつ
- ・児童の考えや意欲を引き出すファシリテート
- ・授業後半にねらいに迫るためのタイムマネジメント
- ・授業のねらいに迫るICT活用力

【児童の改善の方針】

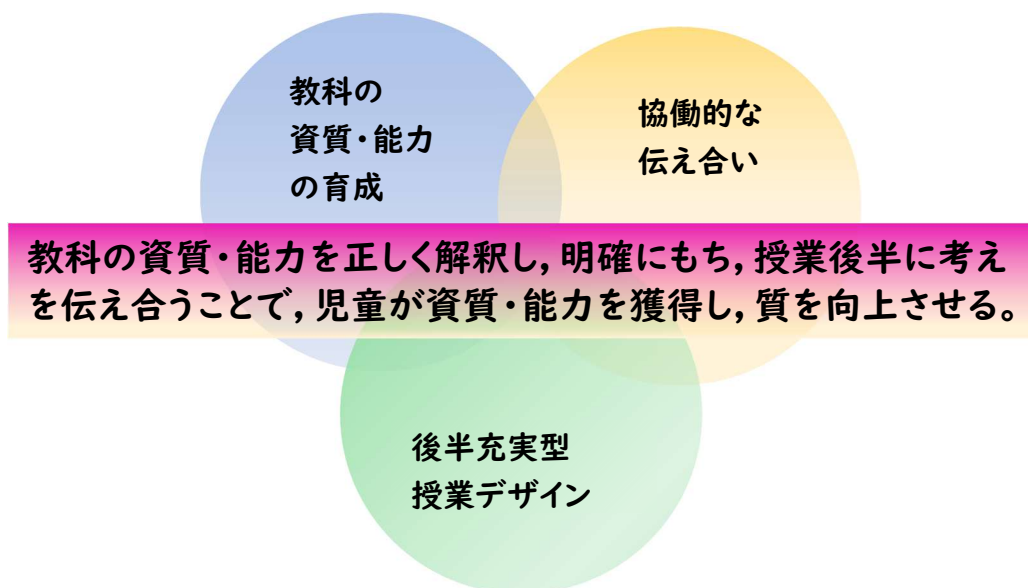
- ・学習に進んで取り組もうとする主体性
- ・ICTを活用し、情報を精査し、学びに生かす情報活用能力
- ・多面的、多角的に課題に取り組む思考力
- ・自分の考えを相手意識をもって伝え合うコミュニケーション力
- ・学んだことをアウトプットする表現力（話す・書く）
- ・学習の過程を振り返る省察力

3 研究の方向性

本校の授業研究に欠かせないことは、「各教科の資質・能力を明確に捉え、付けたい力の具体をもって授業に望む」ことである。そのために、学習指導要領を熟読し、各教科の目標や指導事項を正しく把握し、教材の特徴と児童の実態を合わせて授業づくりをする必要がある。さらに、授業の後半に児童の学びが花開き、付けたい力に迫るための手段として、授業後半に協働的に学び合う時間を確保する。そのためには授業前半において、児童が明確な考えをもたせる工夫をすることが大切である。協働的な学びの場面では、ペアやグループによる交流やICTを活用した情報のやり取りを目的意識をもって実践していく。さらに、協働的な学び合いの後に、授業の前半の自分自身と比較し、パワーアップしたことを自覚する時間を設ける。今年度は、この授業後半のパワーアップタイムを確実に実施し、パワーアップしたこと（まとめ）となぜパワーアップできたのか（振り返り）を区別した授業づくりをしていく。

また、ICTの活用に関しては、使うことが目的にならないように、授業づくりの段階でICT化する必要があるのか、非ICT化（リアル）のままでいいのではないのかを議論していく。

以上のような方向性から、今年度は、「教科の資質・能力の育成」と「協働的な伝え合い」、そして「後半充実型授業デザイン」の3つの柱をもとに、以下のような仮説を立てる。



4 研究主題及び副題

主体的・協働的に学び合う子の育成

～伝え合いを通して、教科の資質・能力を育成する後半充実型の授業づくり～

5 研究用語の定義

「主体的」・・・既存の知識や経験から問題意識をもって、自分の思いや考えを表出すること。

「協働的」・・・児童同士、教師と児童、地域と児童など多様な他者との関わり、他者を尊重し、多様な考えに出会い、考えが広まったり深まったりすること。（ICT活用を含む）

「学び合う」・・・主体的・協働的に学習することで、児童一人一人が自己を変容させ、他者からの学びを取り入れたり、学びを自覚させたりすること。

「伝え合い」・・・話すこと、聞くことだけでなく、書くことも含めて、相手に自分の思いや考えを発信・受信すること。（ICT活用を含む）

「後半充実型」・・・1授業45分間の中の終盤10～15分の時間にパワーアップタイムを設定し、教科の資質・能力を獲得させたり、学びを補充・進化・統合させたりして充実させること。

「パワーアップタイム」・・・授業後半の「まとめ」と「振り返り」の時間のこと。

「パワーアップのまとめ」を段階に応じたものにする。

Level 1	・・・授業者と一緒に書く
Level 2	・・・穴埋めにして書く【低】
Level 3	・・・書き出しや型をそろえて書く【中】
Level 4	・・・自分の言葉で書く【高】

「パワーアップの振り返り」は各学年で検討した文言を使用する。

6 学年研究を軸とした校内研究の推進

本校の研究主題に迫るためには、学年団の結束と協力が必要になる。それは、学年の児童の実態に応じた研究への手立てや指導の工夫が必要になってくるからである。教師個々の経験や指導方法だけでなく、学年団として多面的・多角的な視点で教材を研究し、目の前の児童に合ったオーダーメイド的な指導が必要である。さらに、柔軟かつ行動力がある若手教員と経験豊富であり、熟練の技をもつベテラン教員とが融合することで、校内研究のさらなる推進を図ることができる。

加えて、ICT活用に関する教材研究の際には、一部の教師が単独で計画し実施するのではなく、ICT活用に関しての情報を交換し、学年全体で実践を積み上げるように協力していく。

学校全体	学年	学級
全体研究会（年5回） 全体研究授業（年3回）	学年研究会（週1回） ・朝学習の内容の確認 ・授業改善の振り返り ・教材研究や教具の準備 ・ICTの情報交換 低、中、高学年、特支ブロック 研究授業 （各ブロック年1回、計4回） 等	研究授業（一人1回） 各種研修会 若プロ研修会 等

7 研究の重点

校内研究の「主体的・協働的に学び合う子の育成」に迫るために、2つの重点を置く。「教科の資質・能力を育成するための手立て」及び「協働的に伝え合う手立て」である。研究授業において、必ず位置づけ、児童への細かな手立てを検討していく。また、研究授業を参観する際の授業参観の視点にもなり、教師同士が学び合う視点ともなる。

(1) 教科の資質・能力を育成するための手立て

教科の資質・能力を育成するために今年度は、以下の手立て以外にも目を向け、学年の工夫及び他校の実践を取り入れられる状態にする。以下を例として示す。

例) ①言語活動の工夫

教科の見方・考え方を働かせられる言語活動の工夫、単元構成の工夫等

例) ②発問の工夫

教科の見方・考え方を働かせる教師の深めの発問、問い返し等

例) ③構造的な板書の工夫

教科の見方・考え方が働くような授業の展開や児童の言葉の視覚化

例) ④ICTの活用

教科の見方・考え方を働かせられるタブレット端末の活用（導入の場面や思考場面）

(2) 協働的に伝え合うための手立て

今年度は、伝え合いのレベルアップを図っていく。昨年度、教師と児童で交流の視点を共通理解し、目的をもった交流を図ってきた。さらに、振り返りの場面においても、振り返りの視点を教師と児童で共通理解し、教科の資質・能力の獲得や評価につなげてきた。そのため、今年度は、交流及び振り返りの視点を再度検討し、どのような場面で、どのような交流をすると効果があるのか、さらにはどのような視点の振り返りを行うことで、資質・能力が見える化されるのかを試行錯誤していく。以下に昨年度の交流の視点及び振り返りの視点である。

はなしをつなげる。 じぶんのかんがえをはなす。 ともだちのかんがえをきく。 	ペアでおはなし								
話し合いのポイント <table><tr><td>じしんをつける</td><td>新しく気づく</td></tr><tr><td>プラスする</td><td>へんかさせる</td></tr></table>	じしんをつける	新しく気づく	プラスする	へんかさせる	交流の目的 <table><tr><td>自分の考えを確かめて、自信をもつ</td><td>新たな考えに気づく</td></tr><tr><td>自分の考えにプラスする</td><td>友達の考えをプラスしてあげる</td></tr></table>	自分の考えを確かめて、自信をもつ	新たな考えに気づく	自分の考えにプラスする	友達の考えをプラスしてあげる
じしんをつける	新しく気づく								
プラスする	へんかさせる								
自分の考えを確かめて、自信をもつ	新たな考えに気づく								
自分の考えにプラスする	友達の考えをプラスしてあげる								
わかったこと できたように感じたこと がんばっていたとまたうのこと ふりかえり	ふりかえりのスタンダード <table><tr><td>わかったこと できるように なったこと</td><td>がくしゅう ほうほう 学習の方法</td></tr><tr><td>ともだち かんが 友達の考えで よかったこと</td><td>さいしよ くら 最初と比べて へんか 変化</td></tr></table>	わかったこと できるように なったこと	がくしゅう ほうほう 学習の方法	ともだち かんが 友達の考えで よかったこと	さいしよ くら 最初と比べて へんか 変化				
わかったこと できるように なったこと	がくしゅう ほうほう 学習の方法								
ともだち かんが 友達の考えで よかったこと	さいしよ くら 最初と比べて へんか 変化								
	ふりかえりのポイント <table><tr><td>わかったこと できるように なったこと</td><td>学習の方法</td></tr><tr><td>友達の考えで よかったこと</td><td>最初と比べて 変化</td></tr></table>	わかったこと できるように なったこと	学習の方法	友達の考えで よかったこと	最初と比べて 変化				
わかったこと できるように なったこと	学習の方法								
友達の考えで よかったこと	最初と比べて 変化								
	ふりかえりの視点 <table><tr><td>次に考えて みたいこと</td><td>生活に 活かしたいこと</td></tr><tr><td>友達の考えで よかったこと</td><td>最初と比べて かわったこと</td></tr></table>	次に考えて みたいこと	生活に 活かしたいこと	友達の考えで よかったこと	最初と比べて かわったこと				
次に考えて みたいこと	生活に 活かしたいこと								
友達の考えで よかったこと	最初と比べて かわったこと								

(3) 日常的に書く力を育成する工夫

ア) 短作文の実施

週1回のスキルアップタイムを活用し、児童の「書きたい」「書いてみたい」と思うテーマを設定し、学年に応じた時間と文字数を書けるようにする。

イ) 書き込みの工夫

国語科では、物語文の叙述や説明文の文章にサイドラインを引いたり、算数科で図や式に考えの足跡を残したりと書き込みをする。

ウ) 視写の工夫

丁寧な字を書くことで、日常的に書く字も整ってくる。

エ) 演習問題や適用問題の工夫

週1回のチャレンジタイムを活用して、国語科及び算数科の演習問題で習熟を図ったり、適用問題に挑戦したりすることで活用力を育む。

オ) その他

音読や暗唱などで言葉を覚えて、声に出すことで語彙を習得する。

(4) 各学年研究を軸とした全体研究会の設定

今年度も引き続き、各学年の児童の実態に応じて校内研究を推進し、児童個々に応じたオーダーメイド的な支援をする。そうすることによって、個人や学級の学力格差を生じさせないようにできると考える。以下のような流れで各学年のテーマを設定し、研究を推進していく。



8 蕪城授業デザイン

今年度は、教科の資質・能力を育成するための授業づくりを推進するために、授業後半を充実させ、児童が深い学びに到達できるような授業デザインを計画し、「後半充実型蕪城授業デザイン」へと変革させていく。共通理解を以下の表に示す。

	授業づくりのポイント	めざす子どもの姿	後半充実型へのポイント
つかむ 【導入】	- 導入の工夫 - 既習の活用 - 既習との相違点の明確化 - 学習のゴールの明確化 - 必要感のある課題設定 【目安5分】	学習意欲の喚起・継続 - 課題を理解しようとする - 課題解決への意欲をもつ 見通しをもつ - 前時の学習や既習事項を想起する - ゴールへの見通しをもつ	既習の掲示、ICT、ノート、ワークシート等を活用し、本時のねらいにスムーズに入れるように工夫する
考える 【自力解決】	- 既習のキーワードの活用 - 多様な観点からの考察 - 根拠や筋道の明確化 - 考えの視覚化 【目安5～10分】	思考の場 - 既習事項をもとに考える - 書き込みをして考える - 理由や根拠を明確にして考える	- 考えをもたせる手立てをシンプルにする - 自力解決に時間をかけすぎない - 根拠を明確にした考えを書かせる
深め合う 【ペアやグループ交流・集団検討】	- 児童の「わからない」、「途中までなら言える」の想定し、授業場面に引き出す - 児童の発言や思考をつなぐ - 授業のねらいに迫る深めの発問 - 必要感のあるペア活動やグループ活動 - 全体交流で深め合う 【目安15分】	考えの交流 - 相手意識、目的意識を明確にもつ - 考えの理由や根拠を明確にして説明する - 他者の考えと比較・分類して説明する - 気付きや変容を伝え合う - 視点を与えたり、見つけたりして類型化・一般化で整理する。 再思考の場 - 他者の考えを取り入れて、自分の考えを見つめ直し、広めたり深めたりする	ペア活動 - 簡単な考えの確認 - 自信をもたせる グループ活動 - 筋道を立てて伝える機会を保障する - 他者の考えに触れて、自己の考えをよりよいものにする 全体交流 - ゴールをイメージし、発問を吟味する（深めの発問） - ねらいに迫っている児童の考えを共有する - ICTを効果的に活用する - 考えの広がりやねらいに向けて焦点化する
まとめ 【パワーアップタイム】	- 学びを自覚化させる全体交流の場を工夫する - 学びを視覚化する構造的な板書を工夫する - 学びが深まった児童の思考を広げる工夫をする - さらなる思考の深化・発展につなげる工夫をする	学習内容のまとめ - わかったことを丁寧に書く。 - キーワード等を使って、自分の言葉で書く ふり返り - 他者からの学びを自己の考えに取り入れて書く - 生活や経験と結び付けて書く - 次時への意欲をもって書く - 学び方について書く	- 思考の流れが明確になるように板書を工夫する - まとめやふり返りに生かせるキーワードや書き方等を再確認する - 学びの自覚や達成感につなげる - ICTを活用し、他者からの学びを自己に生かさせる
活用 【適用】	【目安10～15分】	適用問題・活用問題 - 学びを獲得するために取り組む - 学びを活用して取り組む	「見方・考え方」を働かせ、他の場面や問題などを考えたり解いたりする時間を確保する

※【 】の時間は目安であり、授業のねらいや教材により変わる。

学校教育目標

未来を生き抜く人間の育成
～進んで考え、協働して課題を解決する子の育成～

白山市 指導の重点

- ・確かな学力・豊かな心・健やかな体の育成
- ・地域に根ざした、特色ある学校の創造
- ・安全・安心な教育環境の整備

いしかわ学びの指針12か条プラス

- ・活用力を高める授業づくり
- ・学力・学習を支える基盤づくり
- ・指導改善を進める体制づくり

めざす児童像（教師の願い）

- ①考え伝え、学び合う子 …「考える子」
- ②規律正しく、主体的な子 …「やさしい子」
- ③健康・安全な子 …「たくましい子」

主体的・協働的に学び合う子の育成

～伝え合いを通して、教科の資質・能力を育成する後半充実型の授業づくり～

教科の資質・能力を
明確にした授業づくり

（例）

発問や問い返し

構造的な板書

I C T の活用

※学年の工夫等も可

協働的な伝え合い

目的を明確にした交流

ふり返りの場面の設定

後半充実型授業（パワーアップタイム）

校内O J T
若プロ

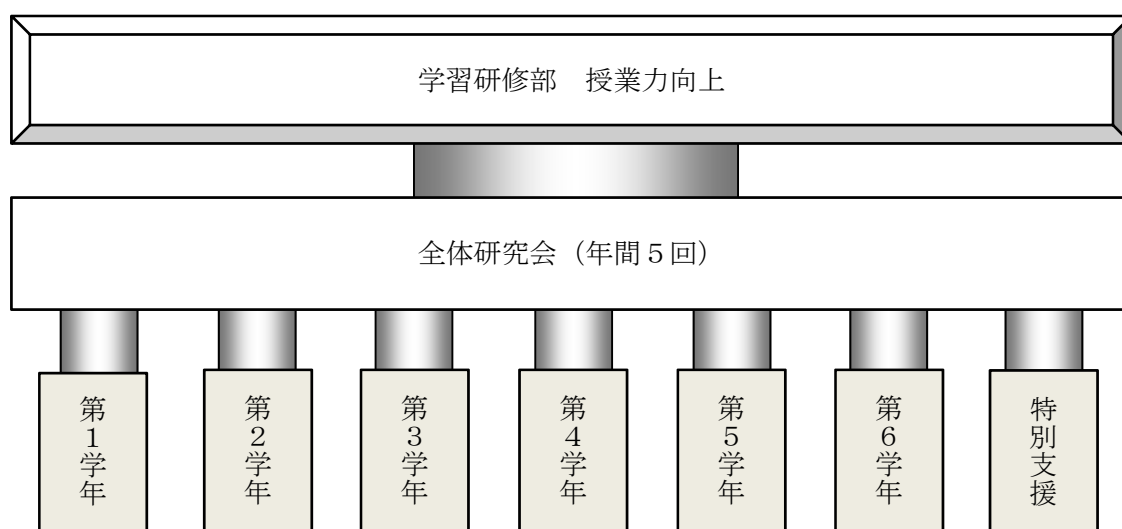
日常的な書く力

家庭学習の充実

あたたかな人間関係の構築

10 研究組織

(1) 研究組織図



(2) 研究組織の役割

①学習研修部（授業力向上担当）

学習研修部の授業力向上担当が中心となり、全体研究会及び各学年の研究の計画・推進を行う。その際、会を運営し、スムーズな進行に務める。

②全体研究会

学校研究全般の検討と共通理解の場とする。

4 月	全体研究会①	本校の研究方針の説明
5 月	全体研究会②	各学年の児童の実態と手立ての検討
8 月	全体研究会③	1 学期の成果と課題，2 学期に向けて方策の検討
1 2 月	全体研究会④	2 学期の成果と課題，3 学期に向けて方策の検討
2 月	全体研究会⑤	年間の研究の成果と課題，来年度に向けての方針

③研究授業

各学年の研究テーマの発表の場を 1 学期，2 学期に各 1 回程度設け，児童の学力向上の実態を見合うこととする。その際の留意点は以下のようにする。

- ・学習指導の研究，実践の発表
- ・児童の実態把握とその共通理解
- ・各専門部会からの提案の共通理解
- ・教科，総合的な学習の時間など教育課程・評価規準の検討
- ・指導案の作成・検討と事前・事後研究会の実施（級外は，担当学年部会の所属）

④学年部会の所属（□囲みは学習研修部担当）

学年部会	担任	級外
第1学年部会	□廿日岩，吉田，本庄，角谷	（京田）
第2学年部会	□阪口，小間，坂本，高木	平元
第3学年部会	□山下，栗津，飯田，星	寺田
第4学年部会	□中橋，□濱高，西幸，西田	□西絢
第5学年部会	□中川，奥村，横川，宮下	山口
第6学年部会	□酒井，坂井，岡崎，成岡	丸石
特別支援部会	□澤邊，永里，杉野，村中	【通級】角山

（3）研究実践の進め方

①研究実践に当たっての留意点を以下に示す。

- 【1】4月中に各学年の児童の実態を把握し，身に付いている力，足りない力を学年で共通理解を図る。
- 【2】5月の全体研究会②において，各学年の実態と手立てについて発表する。（各学年の学研担当）
- 【3】1学期及び2学期に1，2名程度，研究授業を設定し，児童の学力向上の姿を見合う。
- 【4】特別支援学級の研究授業にあたっては，特別支援チーム＋担任を組織し，研究を進める。
- 【5】原則として，毎週金曜日を学年研究会（学年OJT）とする。学年研を活用して，児童の実態について日常的に情報交換するとともに，学習規律や学習環境，教材について話し合い共通理解し，校内研究を進める。
- 【7】全体研究会③，④，⑤の際には，各学年の研究の成果及び課題について分析し，進捗状況の共通理解を図る。
- 【8】年度末には，各学年の研究の成果及び課題について分析し，研究紀要にまとめる。

②全体研究授業（国語科の文学的文章で実施）

低・中・高学年ブロック 各1授業（特別支援学級は実施しない）

参観者 全員

③ブロック研究授業（国語科の文学的文章で実施）

低・中・高学年・特支ブロック 各1授業

参観者 各ブロックの教員及び若手育成プログラムに該当する教員

④学年研

一人1授業（全体研究授業及びブロック研究授業での授業者以外）

参観者 各学年の教員

教科は学年で相談する。全体研及びブロック研は国語科で実施するため，残りは算数科1，タブレットを活用した授業1を実施する。ただし，以下のことに留意する。

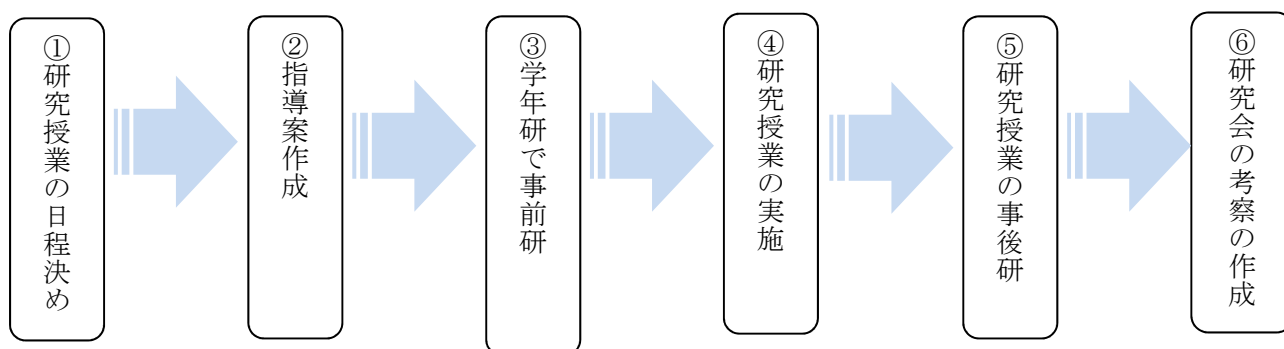
- ・国語科の授業において，同単元で教材研究をして，2人同時に研究授業を実施してもよい。
- ・級外で国語科及び算数科を担当していない場合は，当該教科以外で実施してもよい。
- ・再任用教諭及び非常勤講師，市講師，通級学級担任の教員は研究授業を実施しなくてもよい。

- ・特別支援学級では、児童に実態に応じて研究授業を実施する。

⑤研究授業計画

月	全体研究会	学年研究会	全体授業 ブロック授業	学年授業研究			
				低学年	中学年	高学年	特支
4	全体研究会Ⅰ 研究の概要説明	児童の実態把握	全体研究授業（提案）			全1	
5	全体研究会Ⅱ 学年の実態と手立て	学年実態と手立ての 検討		1	1	1	
6		学年研究授業	ブロック研究授業	1	ブ1	1	
7		学年研究授業		1	1	1	ブ1
8	全体研究会Ⅲ 学年研究1学期の 成果と課題発表	学年研究まとめ					
9		学年研究授業	全体研究授業	全1	1	1	
10		学年研究授業	ブロック研究授業	1	2	ブ1	
11		学年研究授業	全体研究授業	2	全1	1	
12	全体研究会Ⅳ 学年研究2学期の 成果と課題発表	学年研究まとめ	ブロック研究授業	ブ1	1	1	1
				11月下旬の実施も可			
1		学年研究授業					
2 3	全体研究会Ⅴ 校内研究のまとめ （成果と課題） 来年度の方角性 研究紀要の作成	学年研究まとめ 研究紀要の作成					

⑥研究授業までの流れ



⑦研究授業の共通理解

- ・指導案作成後は、学年研究会（学年OJT）で検討し、10日前には研究主任、管理職に提出する。（研究授業の3日前には、全職員に指導案を配付）
- ・研究授業事前研の際には、模擬授業を取り入れ、研究を深める。
- ・研究授業には、日程を調整し、可能な限り外部講師を要請する。

- ・研究授業には、当該学年の級外も参加する。（可能な限り他学年の先生方も参加する）
- ・特別支援学級「ひ」「な」「た」「こ」の研究授業の際は、交流学級の担任も参加し、交流児童の様子を観察する。
- ・研究授業後には、研究授業の考察を作成する。今年度からは、研究授業での学びを全体で共有するために、研究授業後、1週間以内に作成し、研究便りに掲載する。
- ・研究授業の実施は、各学年で期間が集中しないように、各学年1学期、2学期に分けて実施する。

⑧相互参観について

- ・研究授業だけでなく、日常的に互いの授業を参観し合い、授業力向上の一助とする。その際、授業参観シートを書き、授業者へ渡し、校内研究の共有化を図る。